

徳山下松港 <Port of Tokuyamakudamatsu>

- 港格／国際拠点港湾
- 港湾管理者／山口県
- 指定年月日／昭和40年4月



徳山下松港は昭和40年4月に特定重要港湾の指定を受け、主として「周南工業整備特別地域」の中核をなす周南地域(周南市、下松市、光市)の石油コンビナート、化学工業、機械製造業等の活発な企業活動を支える工業流通港として、また、徳山地区においては、大分県国東半島及び周南地域周辺の離島との定期フェリー航路等の拠点港として地域の発展に寄与してきました。

近年においては、石炭需要の増大及び貨物のコンテナ化と、船舶の大型化に対応するため、大水深岸壁や航路・泊地、それらを機能的に活用するための臨港道路の整備を進めており、同時に干潟整備による環境修復等、地域の要望や環境に配慮した港湾整備を図っています。

平成15年には総合静脈物流拠点港(リサイクルポート)に指定され、海上静脈物流とリサイクル産業の拠点形成に向けた取り組みを進めています。また、平成20年には徳山地区の晴海埠頭が全国で初めて民間企業への長期貸し出しを行う臨海部産業エリア形成促進港の指定を受けました。そして、平成23年には、宇部港とともに国際バルク戦略港湾に選定を受け、官民連携の深化等を通じ、今後のさらなる物流の効率化や民間企業の国内投資を呼び込むことで、我が国産業の国際競争力の更なる強化が期待されます。

やまぐち「港」物語 - 徳山下松港 -

明治中期、徳山は不況の真只中を迎えていました。そんな中注目を浴びたのが海軍練炭製造所の設置問題。全町民をあげての積極的な誘致活動と、徳山が佐世保・呉の港を結ぶ位置にあり製品や原料の輸送に有利な土地柄であることが認められ、設置が決定されました。大正10年には海軍練炭製造所は重油の精製に転換し、海軍燃料廠と改称しました。また徳山港の機能性に着目した様々な企業が続々と工場を創設しました。かくして徳山は工業都市として生まれ変わり、街にも再び活気が訪れました。

特別な産物もなかった徳山で工業が発達したのも、運搬が便利な瀬戸内の中心であり、大型船の入港が可能である天然の良港を持っていたことが最大の要因でした。



←山陽波止場
／もともと内海に面し、漁港として栄えた徳山は、藩主の参勤交代のときは乗船の発着場としても使用され、古い時代から港としての機能をもって発展してきました。写真は昭和10年の風景。

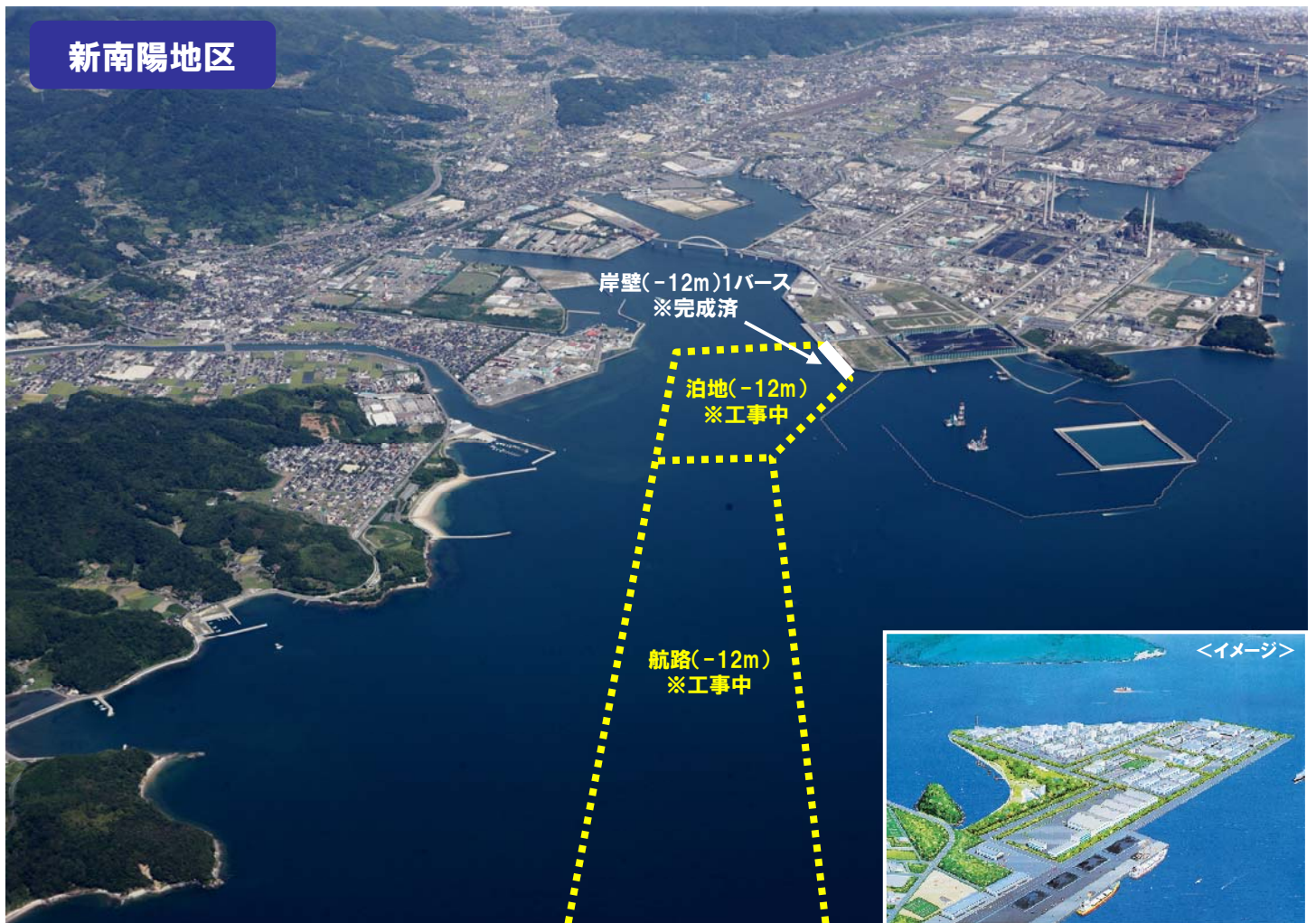


←整備の進む海軍練炭製造所／明治37年に開設され、その後石油の需要が増大したため、さらに施設の拡張整備が行われました。

写真／「ふるさとの思い出 写真集 明治・大正・昭和 徳山」より転載

徳山下松港整備事業の紹介 —新南陽地区国際物流ターミナル整備事業—

新南陽地区



当該地区では西日本最大級の石油化学コンビナートを中心に化学、鉄鋼、金属、ゴム、機械、窯業等の企業が臨海工業地帯を形成しており、原材料の多くを海上輸入しています。

現在の港湾施設においては、水深不足やふ頭用地の不足により船舶の大型化や取扱貨物の増加に対応できない状況であるため、国際競争力の強化、物流の効率化並びに船舶の航行安全を確保することを目的とした、水深12mの国際物流ターミナル整備を行っています。

人工干潟の整備

大島地区



干潟は豊かな生物資源の宝庫であり、水をきれいにしたり、人と海が親しむ場であったりと多様な機能を備えています。

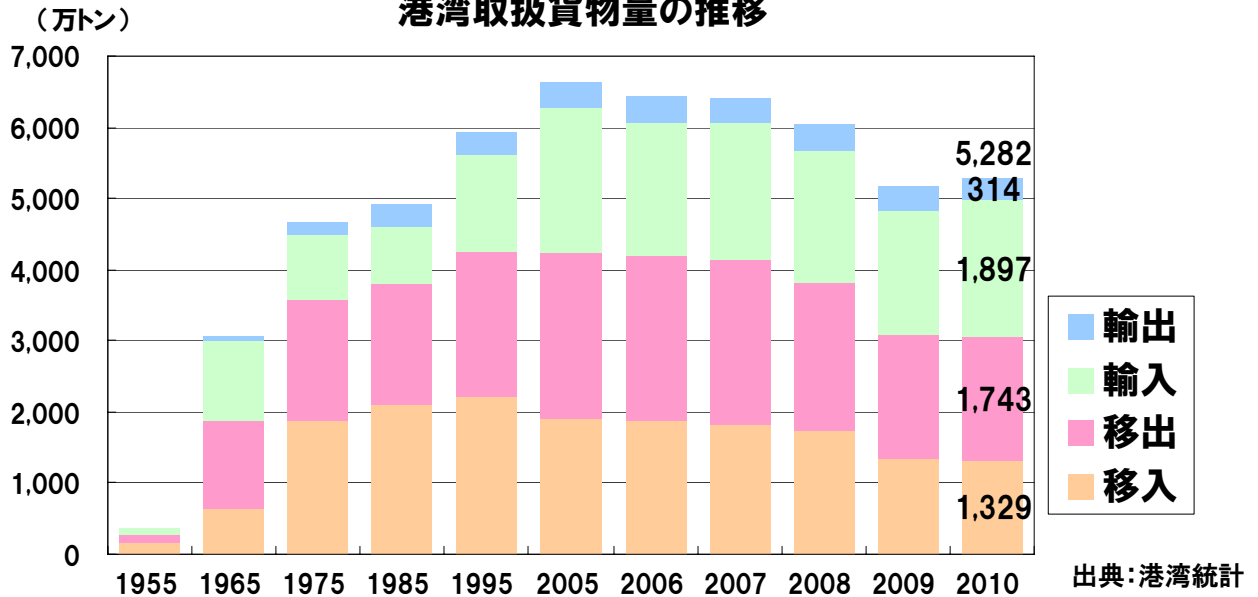
大島地区では新南陽地区の港湾事業で発生する浚渫土砂を有効利用し、アサリの生育場としての活用を目的とした人工干潟の整備を平成17年度より行っています。

周南市と地域の漁港、住民と連携しながら効果的な整備・管理を行います。

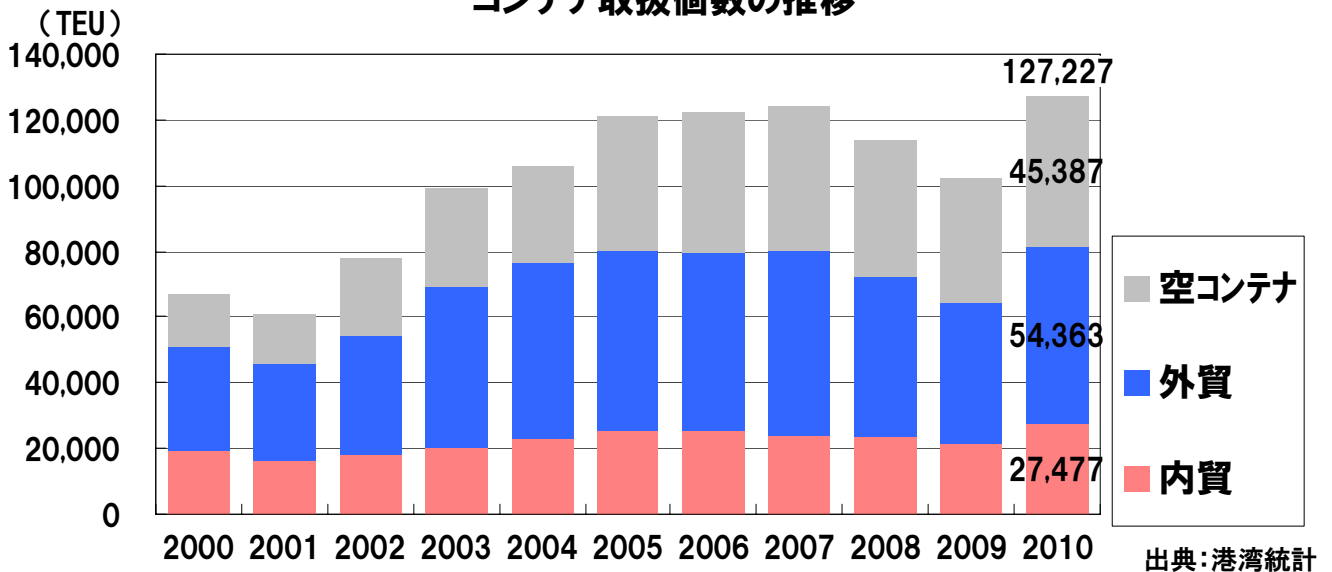


数字でみるみなと - 徳山下松港 -

港湾取扱貨物量の推移



コンテナ取扱個数の推移



外内出入別の主要品目取扱貨物量(2010年)

